

1 検討体制

(1) 哺乳類については、平成28年度に検討委員会を設置し、現地調査は行わず、文献による生息状況の情報収集・整理を行い、評価対象種の選定及びカテゴリーについて協議・検討を行いました。

【秋田県版レッドデータブック改訂検討委員会（哺乳類）委員】

小 松 守 秋田市大森山動物園 園長

佐々木 誠 秋田県立能代高等学校 教頭

島 田 卓 哉 国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所 室長

◎星 崎 和 彦 秋田県立大学生物資源科学部 教授

(五十音順、敬称略、所属等は2019年5月時点、◎はチーフ)

小笠原 嵩 秋田大学名誉教授【平成29年3月退任】

(2) 昆虫類については、平成25年度に検討委員会を設置し、平成26年度から平成29年度まで現地調査を実施しながら、生息状況の情報収集・整理を行い、評価対象種の選定及びカテゴリーについて協議・検討を行いました。

【秋田県版レッドデータブック改訂検討委員会（昆虫類）委員】

青 谷 晃 吉 希少野生動植物種保存推進員

梅 津 一 史 秋田県立博物館 主任学芸主事

◎佐 藤 福 男 秋田自然史研究会 副会長

田 中 政 行 株式会社自然科学調査事務所 環境2部 部長

(五十音順、敬称略、所属等は2019年5月時点、◎はチーフ)

佐々木 明 夫 秋田自然史研究会【平成29年3月退任】

高 橋 雅 彌 秋田自然史研究会【令和元年7月退任】

2 評価対象

対象とした生物の単位は、種及び地域個体群とし、種の単位は種及び亜種としました。対象範囲は本県全域に生息するものとしましたが、本県が本来の生息地ではないと考えられる偶産種や外来種は対象外としました。

3 カテゴリー

本県のカテゴリーについては、環境省レッドリストカテゴリーと判定基準(2019)に準拠していますが、本県の実情を考慮して一部変更している部分もあります。

カテゴリー	基本 概 念
絶滅（EX）	本県ではすでに絶滅したと考えられる種。
野生絶滅（EW）	飼育下でのみ存続している種。
絶滅危惧	絶滅の危機に瀕している種。
絶滅危惧ⅠA類（CR）	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高い種。
絶滅危惧ⅠB類（EN）	絶滅危惧ⅠA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高い種。
絶滅危惧Ⅱ類（VU）	絶滅の危険性が増大している種。
準絶滅危惧（NT）	存続基盤が脆弱な種。
情報不足（DD）	評価するだけの情報が不足している種。
地域個体群（LP）	地域的に孤立している個体群で、絶滅の危険性が高い種。

<付属資料>

カテゴリー	基本 概 念
留意種（N）	<p>①本県では絶滅の危険性はないが、国際的、国内的に保護を要するとされている種。</p> <p>②現在は保護策が講じられていて、差し迫った危険性はないが、それが中止されれば、絶滅危惧Ⅱ類以上に移行する要素を有する種。</p> <p>③過去に個体数や分布が著しく減少した種。</p> <p>④他の機関で準絶滅危惧以上の評価を受けている種の中で、本県での生息状況等に留意すべき種。</p>
継続観測種（CM） ※哺乳類限定	秋田県第二種特定鳥獣管理計画に基づき、人身被害や農林業被害を防止するため、個体数調整捕獲等による個体数管理（サル、ツキノワグマ）、狩猟・有害駆除等による積極的な捕獲の推進（ニホンジカ、イノシシ）及びモニタリング調査などにより、継続的に生息動向を把握し、適正に管理していく必要がある種。

4 秋田県版LR2019選定数及び秋田県版RDB2002掲載数との対比

カテゴリー		哺乳類		昆虫類	
		秋田県版 R L 2019	秋田県版 R D B 2002	秋田県版 R L 2019	秋田県版 R D B 2002
		絶滅 (EX)	0	1	5
野生絶滅 (EW)		0	0	0	0
絶滅危惧	絶滅危惧ⅠA類 (CR)	0	0	35	30
	絶滅危惧ⅠB類 (EN)	10	8	44	29
	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	5	12	43	27
	絶滅危惧計	15	20	122	86
準絶滅危惧 (NT)		5	2	72	46
情報不足 (DD)		2	2	105	45
地域個体群 (LP)		0	0	1	1
合計		22	25	305	181

<付属資料>

カテゴリー		哺乳類		昆虫類	
		秋田県版 R L 2019	秋田県版 R D B 2002	秋田県版 R L 2019	秋田県版 R D B 2002
		留意種 (N)	2	5	2
継続観測種 (CM)		4	-	-	-

5 見直しで明らかになった点

(1) 哺乳類

哺乳類のレッドリスト選定数は、秋田県版RDB2002では30種（留意種5種含む）でしたが、見直しにより秋田県版RL2019では28種（留意種2種、継続観測種4種含む）となりました。

本県では、これまで哺乳類の調査研究が不足しておりましたが、秋田県版RDB2002の公表以降は、とりわけ近年の風力発電事業の進出による環境影響評価調査の増加に伴い、県内に生息している哺乳類の生息確認データが蓄積されたことにより、絶滅の危険性が低いと判断された、ニホンジネズミ、ニホンリス、ムササビ、アカギツネがリスト外となりました。

一方、新たにノレンコウモリの生息が確認されたことにより「絶滅危惧ⅠＢ類」として追加しました。

この他、ニホンジカは、秋田県版ＲＤＢ２００２では「絶滅種」としていましたが、平成２１年度から県内でも目撃情報が寄せられ、被害の拡大を防止するため「秋田県第二種特定鳥獣管理計画（第１次ニホンジカ）」を策定し、常にモニタリング調査などにより生息動向を把握し、適正に管理していく必要がある種として「継続観測種」としました。

（２）昆虫類

昆虫類のレッドリスト選定数は、秋田県版ＲＤＢ２００２では１８９種（留意種８種含む）でしたが、見直しにより秋田県版ＲＬ２０１９では３０７種（留意種２種含む）となり、選定種が大きく増加しました。

検討の結果、カトリヤンマとオオキトンボを「絶滅」に追加したほか、「絶滅危惧」と評価された種が、秋田県版ＲＤＢ２００２と比較すると、新たに１４２種が追加され、２４種がリスト外となりました。

その要因として、各種開発行為等による森林伐採、埋め立てによる草地や湿地の消滅、河川改修による護岸整備、風力発電の進出による高原や海岸砂丘の改変により、生息地が消失したり、環境が悪化してしまったことが考えられます。

また、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する要素を有する「準絶滅危惧」や採集記録が少なく生息状況等が不明のため、絶滅の危険性を判断することができない「情報不足」とされる種も大きく増加していますので、十分な調査と今後の推移に注視していく必要があります。